

個をきたえる学力づくり・授業づくり

～全員参加でできるだけの技能を身につけさせる～

加印 いろえんぴつ 岸本 ひとみ

授業のお客さんが増えていくと、満足感がなくなっていくので、そのストレスからいろいろなトラブルが発生することが多いのです。

### ○自分の考えを表現できるだけの技能を

この時期になると、どの教科の授業も子どもたちの意見交流を教師がつかないで、理解を深めさせたり、結論までもつていったりということができるようになります。でも、よく見ると、一度も発言しなかったり、

反応できていなかったりする子どもを見落としたりしがちです。ペアトークやグループ討論などの中でも、自分の意見が出せなくて顔が曇っている子どもがいるかもしれません。

算数では、立式できるけど計算ミスをして正答にたどりつけず、全体では意見が出せない。国語では、語彙が豊かでないために、自分の意見を表現することができず、書きまとめられない、などなどの子どもがいると思います。

読み・書き・計算の技能は、自分の考えを相手に伝えるために絶対に必要なものです。

### ○授業の組み立てで

基本の技能を身につけさせる取り組みは後半で紹介することにして、授業の組み立てで気をつけていることがいくつかあります。

まず、課題のある子がたくさんいる場合、個々の子どもがどの場面で活躍できるかを考えます。毎時間活躍の場が設けられなくても、一日のうちの1コマ、15分間だけでも活躍できるように組み立てています。

T2の先生との打ち合わせノートに「○○の場面だけは正答できるはずなので、必ず挙手できるように声かけて下さい。」と事前に連絡しておくこともします。

高学年でも、同じ答えを発言してもいいというルールも徹底しています。もちろん指名するときは、説明がうまい子を先にします。そうすることで、参加できる子どもが増えていきます。

### ○算数なら立式の理由づけ

立式の理由づけをいきなり言葉で表現するのは難しいので、2年生の後半からは、吹き出し法を使っています。これは、いろえんぴつサークルの井上さんから教えてもらったやり方です。国語ではよく使う吹き出し法ですが、算数でもけっこう使えます。説明なんて難しいと思っていた子どもでも吹き出したと気軽に書けます。吹き出しに書いてから、ペアトーク、それから発言というように、進めていくと、全員発言が簡単にできます。

もちろん、疑問に思うことも書くので、理由づけの吹き出しと、疑問、コメントのものを分けて設定しておく必要があります。

### ○国語は音読と暗唱、そして視写

国語は音読に始まり音読に終わるといっ

でも過言ではありません。この場合は個をきたえるのですから、一斉音読などではなく、個人個人の音読の力を伸ばすことを考えます。

授業の中でよく取り上げるのは、最初の音読と最後の音読がどう変わったか、というものです。声優やアナウンサーではありませんから、一時間の読解指導だけで劇的に音読が変わることはありませんが、

「どんな気持ちを表現したいと考えて音読しますか。」

と声をかけ、そのつもりで聞くといいのです。聞き手の子どもたちも素直に、

「そうなんだね。」

と納得します。

説明文の結論を全部視写して、それを完璧読みの素材にすると、丁寧に書かないことには音読できないことから、視写をする力が伸びるというような実践もこの時期ならではです。

### ○上半期にきたえるのが基本だけれど

学力研では、4月の年度初めからだいたい1学期間かけて、子どもたちの個々の力

をきたえます。高学年になると、それまでの積み上げがない子どもも多いので、半ぐらいかかることもあります。意識して、丁寧にさかのぼり指導を進めると、下半期は自由に授業ができるようになります。でも、どうもしつくりこないと感じておられる方や、さかのぼり指導なんて進める余裕がなかったと思っておられる方もあると思います。

3学期に向けて、再度個々の力をきたえる必要があると感じておられる方、短期間でできる取り組みいくつか紹介します。

### ○今からでも間に合います

特に、算数の場合は、計算力をピンポイントできたえると、1か月ぐらいいかなり効果が出ます。高学年では、わり算のC型に1か月ぐらい取り組むと、分数計算がスムーズにできるようになります。

理論はどうなっているのかはよくわかりませんが、通分と約分のスピードと正確さが格段に違ってきます。5年生を担任しておられ方には、特におすすめです。最大公約数と最小公倍数の求め方を一通り習った

けれど、スピードがないために四苦八苦している子どもたちへの特効薬です。

冬休みをはさんで、2か月ぐらいの間に、2週間ずつ、わり算A型、B型、C型と取り組んでみて下さい。A型2週間、B型2週間、C型2週間×2回程度です。もちろん、学校で25問から30問、宿題でさらに同じ問題数というように、毎日50題程度は練習させます。

子どもたちの脳って、しばらく計算しないと、できなくなってしまうものですから、毎日練習しているとその逆で、加減計算もできるようになってきます。

### ○最も大事なことは、粘り強さ

6年生を担任していて強く思うこと。少し頑張れば、目の前の課題はできるという経験を積み上げている子どもと、そうでない子どもとは、これからの人生が全く違ってしまふということです。「先生く、オニ！」という悲鳴にもめげず、授業に積極的に参加できるだけの素地を徹底してきたえていくことが、あと4か月の私の私努めです。